

漫画家ときどき菜園家

よだひでき



YAMANASHI People

甲斐のひと、インタビュー



Profile

1953年生まれ、甲府市出身。ミュージシャンを目指し上京するがいつの間にか漫画の世界へ。現在は4コマ漫画や家庭菜園をテーマにした漫画を執筆。全国各地で講演会や地域の小学生に野菜づくりの指導を行う。川崎市在住。

山 梨に帰省すると、実家のある甲府市内から昇仙峡まで自転車をこぐ。しかも変速機とが付いていない、おんぼろな普通の自転車。距離になると10km以上あるかな。夏だと汗をダラダラかきながら。でも、それだけの価値があるんだよね。あの景色は他じや見られない。昇仙峡の景色をみるとあゝ僕は山梨にいらんだって強く感じる。

「子どもたちが大きくなる前は一緒に菜園に出かけては土いじりや収穫をしたよ。やっぱり子どもたちにとつてはいい経験になったんじゃないかな」

現在では地元川崎市の小学生にボランティアで農業体験の指導を行ったりもする。また、農業や家庭菜園についての講演なども全国で行う。

「子どもたちが大きくなる前は一緒に菜園に出かけては土いじりや収穫をしたよ。やっぱり子どもたちにとつてはいい経験になったんじゃないかな」

HIDEKI YODA

「子どもたちが大きくなる前は一緒に菜園に出かけては土いじりや収穫をしたよ。やっぱり子どもたちにとつてはいい経験になったんじゃないかな」

「絵を描くことは小さなころから好きでね。ミュージシャンでは漫画を描いてみようと思った」

「植物を育てるって、収穫まである程度のプロセスがあるでしょ。また、それぞれの野菜によって育

「講演といつても2時間あったら半分はライブになっちゃう。自分の持ち歌を披露したりして」

10代、20代とよださんはミュージシャン志向だった。山梨では深夜ラジオのDJをしたり、テレビのアシスタントをしたこともあった。それがなぜ漫画家になったのか。

「絵を描くことは小さなころから好きでね。ミュージシャンでは漫画を描いてみようと思った」

それから青年誌や新聞に4コマ漫画を連載した。いまでは農産物振興のためのパンフレットや家庭菜園の実用書漫画などを描くようになった。

「植物を育てるって、収穫まである程度のプロセスがあるでしょ。また、それぞれの野菜によって育

て方も、適した土も違う。かといって難しいものじゃなく、少しの知識と手間さえ惜しまなければ、誰にだってできる。趣味としてはとてもいいと思うよ。僕は2ヶ所の畑を借りてるんだけど、ひとつは千坪くらいの畑を50世帯で借りていて、週末とかはサラリーマンのお父さんたちが土を耕しにくるの。みんなが集まるとバーベキューをしたり、炭焼きをしたりと同じ趣味の仲間と知り合える。そんな出会いもすごく大切なものなんだ」

ビートルズ好きでロック好き、音楽の話では若い人とも対等に話すよださんは、年齢を感じさせないステキなおじさん。自分を表現することは、漫画でも音楽でも同じ。今年ミュージシャンとしてメジャーを目指す息巻くパワフルな51歳である。

「植物を育てるって、収穫まである程度のプロセスがあるでしょ。また、それぞれの野菜によって育



1 毎朝4時に起床。早朝の集中できる時間を使って漫画を描く。今は、花づくりをテーマにした漫画を執筆中。写真は「ペン入れ」をしているところ

2 若いころ、目指していたのはミュージシャン。30年来連れ添ったギターでオリジナルの楽曲を歌ってくれる。「僕が作った曲を友達のミュージシャンが歌ってくれるのがうれしい」と曲づくりはコツコツと今でも続けている

3 高度経済成長期に開発された、いわゆる首都圏の「ベッドタウン」に菜園はある。近代的なマンションや密集した住宅を抜けて、忽然と現れるのは緑に覆われた丘。果樹園と菜園が数haに渡って広がる。そこはベッドタウンのオアシスともいえるべき不思議な空間。よださんの手元には収穫したばかりのイモ。「キタアカリ」と「ベニアカリ」

4 よださんの漫画は菜園をする人の立場にたって描く。だからなるべくやさしい内容で、難しいことは書かない。「難しかったらみんなやらないよ。楽しいのが一番」とよださん